

NRI 学生小論文コンテスト2016

募集告知から審査、 そして表彰まで

日本や世界の未来へ向けた“新たな挑戦”を提案する 小論文コンテストがスタート!

「NRI学生小論文コンテスト2016」は、NRIのホームページ上に2016年4月26日に募集要項が発表され、スタートしました。1人でも多くの学生の皆さんに本コンテストをお知らせして、「論文を応募してみよう」という思いを持っていただきたいと、さまざまな告知活動を行いました。全国の高校や大学に案内を送り、チラシ、ポスター、受賞論文集を配布。新聞や雑誌にも広告を掲載し、広く応募を呼びかけました。

全体テーマ “Share the Next Values!”

NRIの長期経営ビジョンのビジョン・ステートメントを、コンテストの全体テーマに掲げています。次世代に向けて、NRIだけでなく、お客様や学校、研究機関、社会と新たな価値を創造し、ともに分かち合う、という思いを込めたものです。

第11回 NRI学生小論文コンテスト2016 野村総合研究所 主催

募集テーマ(抜粋)

世界を変える、新たな挑戦

高校生・大学生・留学生の皆さんは、自身が活躍しているであろう2030年ごろの未来社会を、どのように想像していますか? 明るく希望に満ちた未来の実現のために、解決しなければならない問題が山積しています。これまで、多くの人が知恵を絞ってもなかなか見通せなかった問題を解き明かすには、今までとは違う視点を持つことが必要ではないかとNRIは考えています。例えば、働き手となる「生産年齢人口」(15歳以上65歳未満人口)の減少に伴い経済減速が懸念されています。欧州では、生産年齢人口の問題を移民の受け入れの課題として捉えていま

Share the Next Values!

す。しかし、日本では、様々な分野で「働くロボット」の開発の課題に置き直そうとしています。このことは、社会の摩擦を少なくすることに加えて、ロボット技術の輸出によって日本経済を発展させる可能性があると考えられています。このように、1つ1つ来への新たな「可」皆さんも、日本提起してみませんか。自身が挑戦したい日本や世界の未来を、お持ちしています。

今年のテーマは 「世界を変える、新たな挑戦」

学生の皆さんが社会の中核となって活躍している2030年代。希望に満ちた未来を実現するためには、日本や世界には解決すべき問題が山積しています。これまで多くの人が知恵を絞ってもなかなか見通せなかった問題を解き明かすために、独自の視点や発想を持ち、新たな可能性を見出す提案をしてほしいという思いを込めて、今年のテーマを設定しました。

大学生の部

賞 [大賞1名] 賞金50万円 [優秀賞 若干名] 賞金25万円 [奨励賞 若干名] 賞金5万円

字数: 4,500~5,000字 (別途400字程度の要約を添付)
応募資格: 日本国内の大学院、大学、短大、高等専門学校(4~5年)に在籍している学生で、2016年7月1日時点で27歳以下の、個人またはペア(ペアの相手は、大学生の部、留学生の部の応募資格者のいずれでも可)

留学生の部

賞 [大賞1名] 賞金50万円 [優秀賞 若干名] 賞金25万円 [奨励賞 若干名] 賞金5万円

字数: 4,500~5,000字 (別途400字程度の要約を添付)
応募資格: 日本国内の大学院、大学、短大、高等専門学校(4~5年)、日本語学校に在籍している留学生で、2016年7月1日時点で30歳以下の、個人またはペア(ペアの相手は留学生の部の応募資格者に限る)。

高校生の部

賞 [大賞1名] 賞金30万円 [優秀賞 若干名] 賞金15万円 [奨励賞 若干名] 賞金3万円

字数: 2,500~3,000字 (別途200字程度の要約を添付)
応募資格: 日本国内の高校、高等専門学校(1~3年)に在籍している学生で、2016年7月1日時点で20歳以下の、個人またはペア(ペアの相手は高校生の部の応募資格者に限る)。
※大学進学をめざして勉強している大学受験資格を持つ学生の方は、大学生の部にご応募ください。

募集期間

【大学生の部】【留学生の部】
【高校生の部】2016年7月1日(金)~9月5日(月)
・オンライン送信の場合は、締め切り当日中に事務局で受信したもので有効
・郵送の場合は、【高校生の部】は2016年9月13日(火)午前中必着、【大学生の部】【留学生の部】は2016年9月6日(水)午前中必着

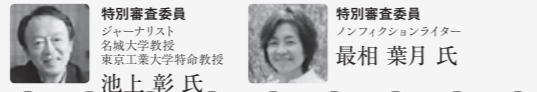
応募方法

下記の「コンテストホームページ」でテーマ詳細や応募要項を確認の上、「応募用紙」をダウンロードし、必要事項と論文(本文、要約)を記入して、以下のいずれかの方法でお送りください。

- ①「コンテストホームページ」の応募画面からオンラインで送信
- ② CD-Rに保存の上
- ③ 応募用紙に手書きまたはE-mailでご送信

審査方法

野村総合研究所社員、ジャーナリスト、名城大学教授、ノンフィクションライター、最相 葉月氏による最終審査を行います。
※2016年度より審査基準が変更されています。



全国の学校で コンテストへの応募を呼びかけました

全国の高校や大学に案内を送り、校内の掲示板や書店のインフォメーションコーナーなどにポスターやチラシを掲示して、コンテストをアピールしました。NRIグループの社員有志は「社内応援団」として告知活動を展開し、出身校にメッセージを添えてポスターやチラシを送ったり、直接学校に赴いて先生や学生たちにコンテストへの応募を呼びかけました。(詳しくはP.72)



埼玉大学 学生食堂



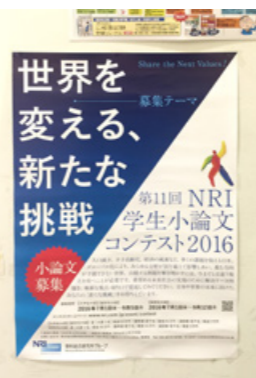
和歌山大学 学生食堂



東京大学 本郷キャンパス



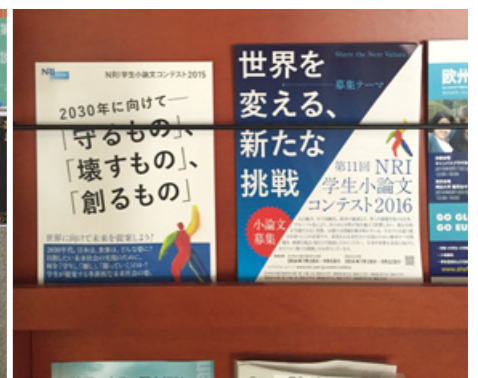
金沢大学 留学生係



三省堂書店 明治大学 駿河台店



九州大学 伊都キャンパス 学生食堂



立教大学国際センター

厳正な審査を経て、 入賞論文を決定しています。

「NRI学生小論文コンテスト」の審査には、
[予備審査→1次審査→2次審査→最終審査会]という
ステップを設けています。
どのステップにおいても、応募者の在籍校・性別・氏名などの
属性は秘匿し、厳正に審査を行っています。
また、各応募作品は複数の者が評価し、
評価の偏りがないようにしています。

論文審査の評価基準

【今回から審査基準を変更】

- 審査項目をこれまでの「考察力・分析力」「提案力」「文章力」から、「問題発見力」「問題提案力」「文章力」に変更
- 従来の発想にとらわれない斬新な切り口で問題提起することが、未来を創る第一歩になると考え、「問題発見力」の部分に与える加点のウェイトを高く設定

1「問題発見力」

- 独自性・斬新さを持った問題の提起がなされているか
- 論点に対する切り口の鋭さ、考察の深さ
- 具体例、数値を使用するなど、論点の分かりやすさ

2「問題解決力」

- 提案や解決策のスケールの雄大さ、視野の広さ
- 提案や解決策の独自性・実現性

3「文章力」

- 論文構成の分かりやすさ
- 文法の正しさ
- 誤字・脱字の少なさ

評価基準以外のプラスアルファ

評価基準に該当しない尺度においても、特に評価が高い論文は加点
(例：独自の調査・取材の実施、執筆者の熱い思いなど)



「NRI学生小論文コンテスト2016」スケジュール

募集

大学生の部・留学生の部 | 2016年7月1日～9月5日
 高校生の部 | 2016年7月1日～9月12日
 コンテストの告知活動を通じて応募を呼びかけ、全国から3,103の論文が寄せられました。

予備審査

9月6日～10月12日
 事務局が集まった論文全てに目を通し、応募基準やテーマを満たしているかチェック。基準に達している論文が1次審査に進みました。

1次審査

10月19日～11月2日
 NRIグループの社員105名が、手分けをして審査。その結果、評価の高かった24の論文(大学生の部8、留学生の部6、高校生の部10)が2次審査に進みました。

2次審査

11月11日～11月21日
 特別審査委員の池上彰さん、最相葉月さんを含む9名の審査委員それぞれが24の論文を読み、評価基準に基づいて採点、順位付けを行いました。

最終審査会

11月25日
 9名の審査委員が集まり、議論を経て、10の受賞論文(大学生の部4、留学生の部2、高校生の部4)を決定しました。

入賞論文発表

12月2日
 NRIホームページ上で発表しました。

審査委員が議論を深め、 受賞論文を決定しました



NRIグループ社員による1次審査の結果、24の論文(大学生の部8、留学生の部6、高校生の部10)が2次審査に進みました。2次審査では、NRI理事長の谷川史郎をはじめとする社内審査委員に、特別審査委員の池上彰さん、最相葉月さんを加えた9人が24の論文すべてを評価しました。

2016年11月25日、NRI本社会議室で2次審査委員が一堂に会した最終審査会が行われました。3時間に及ぶ意見交換、議論を経て、10の受賞論文(大学生の部4、留学生の部2、高校生の部4)を決定しました。

[最終審査会参加者]

審査委員長

谷川 史郎 NRI 理事長

特別審査委員

池上 彰 ジャーナリスト、名城大学教授、東京工業大学特命教授

最相 葉月 ノンフィクションライター

審査委員

三浦 智康 執行役員 未来創発センター センター長

淀川 高喜 研究理事

中野 ひなつ 証券ソリューション事業本部HRM室 室長

山之内 亜由知 ITアーキテクチャーコンサルティング部 上級専門職

野呂 直子 コーポレートコミュニケーション部 部長

本田 健司 サステナビリティ推進室 室長

[全体講評]

審査委員長

谷川 史郎 NRI 理事長

今回のテーマに対して、実に幅広い課題を扱った作品が集まり、難しい選考となりました。時代に大きな転換点が来ている今、希望ある未来社会の実現のために必要なのは「問題を発見する力」であると考え、課題設定のユニークさを選考の基準として最も重視しました。さらに、課題を解決したときの日本や世界に対するインパクトの大きさや、筆者自身がその課題にどのように向き合おうとしているかという点も選考の軸となりました。「そんな見方があったのか」と驚くような、斬新で独自の視点から課題を設定した作品が、今回の受賞作品に選ばれたと考えています。



特別審査委員

池上 彰さん ジャーナリスト、名城大学教授、東京工業大学特命教授

今回の最終審査に残った作品は、甲乙つけがたい、レベルの高いものばかりでした。特に大学生の部には独自性や斬新さがあり、大変読み応えがありました。高校生の部にも「高校生がこんな発想をするのか」と驚かされるような作品や、文章や論理展開に優れた作品が多くありました。選考の基準の一つに実現可能性を挙げていますが、論文を書く際にあまりそのことにこだわると、発想が小さくなってしまいます。ぜひ大志を抱いて、突き抜けた発想を提示してほしいと思います。

特別審査委員

最相 葉月さん ノンフィクションライター

「変える」という言葉はある種の魔法の言葉で、変わるころには何か大きな期待感を抱かせるものがあります。しかし、実際には変えないという選択もあり、変えるか変えないかを判断するためには、現状を深く知り、理解する姿勢が大切です。

今年の作品には、現状がどうであるのかを平らかな心で検証して理解しようとし、そこから独自のアイデアを打ち出している論文が多く見られ、大変素晴らしいと思いました。また、実体験をもとにしながら、個人よりもむしろ「公」の問題を見据えた論文が多かったことも印象的でした。



大学生の部 — 「世界を変える」独創的な 構想と実現に向けた強い意志を示す

[受賞候補論文] *文中での呼称

- 日本の森林資源とまきのこ栽培による砂漠緑地化プロジェクト — 無から有を生み出す挑戦 *「まきのこ」
- 昆虫飼料活用による世界の食料問題の解決への挑戦 *「昆虫」
- マイナンバーを利用した「社会奉仕活動ポイント付与制度」 *「マイナンバー」
- 海中コロニーの建設 *「海中コロニー」

※他に4つの論文が最終審査に進みましたが、誌上では受賞作品について取り上げました。

構想のユニークさから 他と一線を画す上位作品

谷川—大学生の部は粒ぞろいで、読み応えのある作品が多いと思います。評価が高かったのは「昆虫」「マイナンバー」「まきのこ」です。この3つは他の作品とは一線を画すレベルだと思います。私としては、「まきのこ」が面白いと思いました。日本の余っている森林資源でまきのこを作って、その原木で砂漠を緑化しようという組み合わせがユニークです。構想がダイナミックで、ストーリー性にも大変興味をひかれました。

淀川—「まきのこ」は、自ら行っている事業をベースにして、世界規模での環境問題への取り組みへと発展させていて、説得力があります。「昆虫」は、昆虫食への可能性を自らの調査によって魚の養殖への適用として具体化し、実現可能性を高めている点が評価できると思いました。

野呂—「昆虫」は、水産業の養殖魚の飼料高騰という問題をコオロギを活用した食料循環型システムとして提言している発想に独自性があります。「まきのこ」は

森林問題→まきのこ栽培→砂漠の緑地化と、発想をステップアップさせている点が面白いと思いました。

三浦—「昆虫」は、魚の養殖飼料の問題を取り上げ、コオロギを餌にするという着想が大変面白いと思います。廃棄野菜をコオロギの餌にし、その糞を野菜の肥料にするという食料循環型システムの提案にもオリジナリティを感じました。

最相—「昆虫」は身近な自然に目を向けて自ら取材を行っていて、世界の食料

審査委員

三浦 智康

執行役員
未来創発センター
センター長



実現性の難しさがあるからこそ、そこから新しい技術や革新が生まれてくるのだと思います。難しい問題の解決に果敢に取り組んでいる作品には、未来への期待感を抱き、高く評価しました。



問題に挑戦している提案で、具体的に起業を計画する強い意志も応援したいと思いました。論文としての完成度はこれが一番高いと思いました。

本田—論文としては「昆虫」も「まきのこ」も同じくらい優れていると思います。昆虫を食料問題の解決に利用する考えはすでに知られていますが、昆虫を水産物の飼料にする発想は新しいですし、関連情報をよく調べていると思いました。まきのこで砂漠を緑地化するという話は初めて知ったので、その斬新さで「まきのこ」のほうを高く評価しました。

谷川—お話を伺っていると「まきのこ」のほうが「昆虫」より少し評価が高いようですね。

*

谷川—「マイナンバー」についてはどうでしょうか。私はマイナンバーと社会奉仕の組み合わせを評価したいと思いました。

淀川—マイナンバーを利用したボランティアポイント制度の運用イメージが示されていて、優れた提案だと思います。

中野—「マイナンバー」は、私は一番好きな論文です。「世界一の長寿国である日本が、どうして世界一の福祉国にならないのか」という問題提起から始まり、非常に論理的に読み進めていけますし、感情にも訴えるところがあり、論文として、とてもまいと思いました。



野呂—介護のテーマは語り尽くされている中、「マイナンバー」は解決策が具体的で、実現可能性と説得力があります。ボランティアのポイント制は各地で実施済みですが、マイナンバーを活用し、自分の介護時に使える点が新しいですね。

最相—良心的兵役拒否の話から介護を考えるという視点が斬新でした。切実な介護問題を「このようにしたら社会に貢献した分が戻ってくる」という分かりやすい方法で解決しようというアイデアを評価したいですね。

山之内—単純な労働力提供ではなく、研修を伴ってまとまった期間活動するボランティアプログラムは、日本ではあまり普及していません。諸外国での動向や国

内の災害後のボランティアの状況を踏まえて、取り組みを持続可能にするために必要な支援制度などをよく調べていると思いました。

三浦—人手不足が進む社会奉仕活動の推進のために、マイナンバーという最新の社会基盤を活用する発想は、すぐにも採用できそうな提案だと思います。

谷川—池上さんは「海中コロニー」を最も高く評価されていますが、「海中コロニー」に対してはいかがですか。

池上—これは皆さんの評価が分かれるのではないかと最初は思ったのですが、構想が雄大で夢があり、実現性についてもよく検討されていると思い、高く評価しました。

「世界を変える」視点から、「まきのこ栽培」の可能性を提案した論文を大賞に

池上—「まきのこ」「昆虫」「マイナンバー」の3つの中で、どれが大賞で、他の2つが優秀賞という感じですね。

淀川—科学ものとして「昆虫」「まきのこ」「海中コロニー」を比較すると、夢があるのは「海中コロニー」で、具体性があるのは「昆虫」と「まきのこ」ですね。

谷川—評価の高い「まきのこ」と「マイナンバー」を、世界を変えるというレベル感で比較するとどちらでしょうか。

池上—やはり「まきのこ」だと思いますね。

審査委員

中野 ひなつ

証券ソリューション
事業本部HRM室
室長



今回特に驚いたのは高校生の論文です。日本と世界の未来を良くしていこうという視座の高い論文が多く、素晴らしいと思うと共に頼もしく感じました。そのような作品を高く評価しました。

谷川—それでは大賞は「まきのこ」で、「マイナンバー」は優秀賞ですね。

池上—私は「昆虫」も優秀賞にふさわしいと思います。

谷川—他に「これにも賞を」という作品はありますか。

最相—「海中コロニー」はいかがでしょうか。すでにある建設会社での計画を調べたところ、概念は似ていますが形やアイデアにはかなり違いがありました。具体的に絵を描いていて、とても個性的で面白いと思います。

池上—では、これを特別審査委員賞としてはどうですか。

谷川—そうですね。では大学生の部の大賞は「まきのこ」、優秀賞は「マイナンバー」と「昆虫」、特別審査委員賞は「海中コロニー」に決定します。

留学生の部 — 留学生の視点から、異なる文化や宗教への理解の必要性を訴える

[受賞候補論文] *文中での呼称

- 日本のイスラームとの関わりの再考 *「イスラームとの関わり」
- 多文化共生社会を目指す—外国人女性への支援に向けて *「多文化共生社会」

※他に4つの論文が最終審査に進みましたが、誌上では受賞作品について取り上げました。

これまで扱われてこなかった テーマ領域の作品

谷川—留学生の部は、「海外から日本に来た学生の日から見ると、こういうことがあるのだな」というテーマがいろいろと出ています。興味深いテーマが多いのですが、これまであまり扱われてこなかったテーマで、評価の得点も高いものとして、「イスラームとの関わり」と「多文化共生社会」があがってきています。

山之内—私は「イスラームとの関わり」は留学生らしい独自の切り口や観点があって、とても良いと思いました。ハラル対応や文化的違いを考慮することでビジネスチャンスが生まれ、在日・来日イス

審査委員
淀川 高喜
研究理事



大学生の部はどの作品も読み応えがあり、高校生の部は扱うテーマがバラエティに富んでいる上に力作ぞろいで、選考に苦労しました。留学生の部には、もう少し留学生としての視点が欲しいと思いました。

ラーム教徒とwin-winの関係が築けるといふ提案も具体的です。私自身もハラルのことは知っているつもりでしたが、理解しきれていなかった面もあるという気づきがありました。

三浦—イスラーム世界の重要性は分かりますが、なぜ相互理解が進まないかをもっと掘り下げて、それを解決する提言が欲しかったと感じました。

本田—イスラーム教徒の対応という発想は、日本人からは出てこない発想で、面白いと感じました。大きなビジネスになる可能性もある提案なのではないでしょうか。

池上—今、日本でもハラルが目されるようになり、飲食店でもハラルの表示が見られるようになっていたので、私はテーマとしての新しさはあまり感じませんでしたね。

中野—日本におけるハラル対応の問題など、知らなかったことが書かれていて勉強になりましたが、私は日本や世界の未来のために具体

的にどういふことを提案している論文なのか、あまりよく理解できませんでした。

*

谷川—では、もう一つの「多文化共生社会」についてはいかがですか。

池上—これからますます増えるであろう国際結婚について丁寧な調査をしていて、中国人妻がどんなことを悩んでいるのかという生の声が収録されていて、そういう発想を含めて良い論文だと思いました。

淀川—中国人妻というところに焦点を当て、その声を集めている点が特徴的で



面白いと思います。

最相—自分で調べて書いていて、現代の中国人妻が抱える問題には日本人の妻と共通の問題もあれば、外国人特有の問題があるという点も比較されていて、もっと知りたいという思いを持ちました。サンプルが少ないのが残念ですが、この論文は多文化共生社会には必須の問題提起になっていると感じます。ここから発展して、今後も欧米系の妻や外国人夫との比較などの調査も試みてほしいですね。

特別審査委員が推す2作品を 特別審査委員賞に

池上—気が付いたのですが「多文化共生社会」は私と最相さんの得点が同じくらいですね。

最相—確かにそうですね。

池上—先に特別審査委員賞を決めるのは異例ですが、これは特別審査委員賞にふさわしいのではないのでしょうか。

審査委員
山之内 亜由知
ITアーキテクチャー
コンサルティング部
上級専門職



提案内容に独自性や新規性があり、必要となる仕組みを具体的に組み立てている論文を高く評価しました。自ら「こういうことをやっていきたい」と意思表示をしている論文には、応援したいという思いを持ちました。

谷川—そうですね。では「多文化共生社会」は特別審査委員賞としましょう。他に、取り上げたい作品はありますか。

最相—イスラームを扱った論文はこれまでありませんでしたか？

池上—なかったですよ。

最相—「イスラームとの関わり」はテーマ性から言うとユニークさはあまりないのですが、イスラームへの理解は日本にとって喫緊の課題だと思うのです。この作品が本コンテストとしてイスラームについての作品を取り上げる一つのきっかけになればと思うので、私はぜひ推したいと思います。

池上—それに「イスラームとの関わり」は最相さんと私は同点に評価していますよね。これについても特別審査委員賞にふさわしいのではないのでしょうか。

谷川—大賞・優秀賞が該当作品なしで、特別審査委員賞が2作品になりますが、問題ないですか。

野呂—大賞か優秀賞がなしということは過去にありましたが、特別審査委員賞だけというのはこれまでないですね。



谷川—前例はないですが、留学生の部については、今回は大賞・優秀賞は該当作品なしということで、特別審査委員賞は「多文化共生社会」と「イスラームとの関わり」の2作品に決定します。

高校生の部 — 斬新な発想力で、世界規模の問題の解決に挑む

[受賞候補論文] *文中での呼称

- 「機種変更携帯と太陽光充電器で、すべての子供たちに教育を届ける」
*「機種変更携帯」
- 「人間の安全保障理事会」構想
—人類を守る、新たな安全保障の枠組み *「人間の安保理」
- 拡張型心筋症治療の未来—心臓移植以外の手段で命を救う
*「拡張型心筋症」
- 多数決から見た世界 *「多数決」

*他に6つの論文が最終審査に進みましたが、誌上では受賞作品について取り上げました。

いずれも上位の賞にふさわしい作品

谷川—高校生の部も力作ぞろいで、テーマ領域も幅広いですね。評価が大きく分かれたものもあり、選考が難しそうです。集計結果では4作品の評価が高く「機種変更携帯」「人間の安保理」「拡張型心筋症」「多数決」の順です。

淀川—高校生の部の作品は、どれが賞をとってもおかしくないほど甲乙つけがたいですね。

三浦—「機種変更携帯」は貧困地域の子供の教育に中古携帯を活用するという

審査委員

野呂 直子

コーポレート
コミュニケーション部
部長



論文を評価する際には、課題を発見する視点が斬新であるかを重視しています。さらに、課題に自らがどう関わっていくのかという筆者の主体性も、評価する上で大変重要なポイントであると考えています。

着想が壮大で、同世代を巻き込んだ運動に発展させようとする意思も評価したいと思いました。

山之内—この論文には、自ら推進していきたいという強い熱意や、行動を起こそうとしていく勢いを感じました。具体的な試算をしている点もよいと思います。

本田—タブレットPCで学校に行けない子に教育するというアイデアはありますが、日本の機種変更で発生する古い機種を活用する着想はユニークです。

最相—調査を行い、機種変更携帯の具体的な活用方法をしっかり記述している点が評価できます。身近なニュースでの気づきから世界レベルの問題解決を目指す挑戦的なアイデアだと思います。すぐにでも進めてほしい提案です。

*

谷川—「人間の安保理」についてはいかがですか。

本田—高校生の作品は確かに互角だと思いますが、「人間の安保理」を読んだとき、大胆な発想だなという印象を受けました。「世界を変える、新たな挑戦」というテーマ性と照らすと、一番びつたりくる作品だと感じて高く評価しました。



山之内—安保理の問題は古くから言われていますが、現行の安保理の課題を改めて整理し、新組織の選出方法や任期を具体的に定義しています。課題提起から解決に至る論文構成のまとまりが大変優れています。

池上—実現可能性はともかくとして、国家が破綻しているような状況の中では、このような問題意識を持って理想を追うことは大切だと思い、評価したいと思いました。

中野—「人間の安保理」は、現在の世界情勢に対する若者の不安感を表している論文なのではないかと感じました。自分なりに現在の安全保障理事会の複雑な問題を理解し、解決策を考えようとする姿勢は素晴らしいと思います。

最相—私が評価する際に重視するのは、あまり大きなことを言わずに、自分がそこで何をするのかという点です。そういう意味では「人間の安保理」は問題意識は理解できるのですが、自分が何をするのかはあまり見えてきませんでした。

中野—表彰式に来てもらって、話を聞きたいです。

谷川—なるほど、執筆者に会ってみたいということですね。

*

谷川—「多数決」についてのコメントもお願いします。

野呂—他の高校生と全く異なった着眼点に独自性を感じます。「世界を変える、新たな挑戦」というテーマに対して、多数決を課題として抽出したことに心惹かれました。

淀川—問題設定が極めてユニークな論文です。深く考えてみると、こういう設定の仕方もあると感じましたし、どう多数決をすればよいかという答えが自分の言葉で明確に書かれている点にも納得感がありました。

機種変更携帯で世界の子供たちに教育を届ける提案が大賞に

谷川—ひと通り意見が出たところで、「機種変更携帯」「人間の安保理」「拡張型心筋症」「多数決」の4作品のうち、大賞と優秀賞について議論したいと思います。

最相—気が付いたのですが、池上さんと私の評価に近いのは「多数決」だけです。特別審査委員賞を出すのならこれだと思いますが、どうでしょうか。「多数決」は本当に自分の言葉で書いていて、文章も一番うまいと感じました。

池上—多数決についての問題提起は新規性がありますし、特別審査委員賞にふさわしいと思います。多数決に問題提

審査委員

本田 健司

サステナビリティ
推進室 室長



「世界を変える、新たな挑戦」というテーマに合致しているかどうかを重視しました。実行にあたっての課題の洗い出しが多少弱くても、大胆な発想や挑戦の姿勢がテーマに合致していると感じる論文は高く評価しました。

起している論文は、多数決ではなく決めたということですね。

谷川—先に特別審査委員賞が決まりましたが、大賞と優秀賞はどうですか。得点の最も高い「機種変更携帯」と評価の高い「拡張型心筋症」を比較すると、大賞はどちらでしょうか。

淀川—「拡張型心筋症」はかなり専門性が高いので、読んだ人の評価が分かれると思います。そういう意味で「機種変更携帯」のほうがよいと思います。

池上—「拡張型心筋症」は優秀賞でしょうか。

谷川—では「拡張型心筋症」は優秀賞として、もう1つ優秀賞を出すなら「人間の安保理」ですが、よろしいですか。

一同—賛成です。

谷川—それでは、高校生の部の大賞は「機種変更携帯」、優秀賞は「拡張型心筋症」と「人間の安保理」、特別審査委員賞は「多数決」に決定します。

受賞者の皆さん、おめでとうございます!



2016年12月22日、受賞者とそのご家族、学校関係者を招き、東京ステーションホテルにおいて「NRI学生小論文コンテスト2016」の表彰式と祝賀会が開催されました。

表彰式では、NRI取締役会長 嶋本正が、「NRIの長期経営ビジョンを表すビジョンステートメントは、“Share the Next Values!”です。NRIは特に“ともに分かち合う”という意味の“Share”という言葉大切にしています。本日は、皆さんと論文発表や祝賀会を通じて、今回の論文に込めた意気込みや受賞の喜びを“Share”したいと思います」と祝辞を述べました。

続いて、受賞者が一人ひとり壇上に立ち、緊張しながらも晴れがましい表情で、嶋本会長から表彰状と副賞を受け取りました。



受賞者の言葉



**[大学生の部]
大賞**
井上 はるか さん

ま さが大賞を頂けるとは思っていませんでしたが、受賞できたことは本当に嬉しく、光栄に思います。私がこのコンテストに応募したのは、もともと文章を読んだり書いたりすることがとても好きで、自分の考えを発信できる場がほしいと思っていたからです。今回、皆さんの発表を聞いて、自分には全く思いつかないような新しい発想を知ることができ、大変貴重な機会を頂きました。これからは自分のプロジェクトに頑張っ取り組み、皆さんに負けずに一層精進していきたいと思ひます。ありがとうございました。



**[留学生の部]
特別審査委員賞**
ハリー セイザー さん

大 学のゼミでの研究が大変になり、レポートや論文の数も増えてきた中で、自分の日本語の力がまだ足りないと感じていたため、このコンテストに応募しようと考えました。まさか自分が受賞できるとは夢にも思いませんでしたが、特別審査委員賞をいただき、大変ありがたく思ひます。テーマについては、イスラームに関わる日本の国際関係を勉強したいと思ひて選びました。今後も日本にはイスラーム教の人たちが増えていくと思ひますので、私の書いたことは非常に大きな問題提起だと考えています。



**[留学生の部]
特別審査委員賞**
李 卓 さん

こ のような素晴らしい賞をいただき、ありがとうございます。私は大学院で家族社会学を研究しており、自分のいとも日本人の女性と結婚しているため、国際結婚というテーマは面白いと思ひ、選びました。この論文を書いて一番良かったことは、外国人女性たちが今求めている援助について発信できたことです。春には卒業して中国に帰る予定ですが、私が一番美しい日本語だと思ひ『一期一会』という言葉に胸に、日本で出会った方々や日本での思い出は一生忘れずにいようと思ひています。



**[高校生の部]
大賞**
南口 虎太郎 さん

私 が「世界を変える、新たな挑戦」というテーマに対して教育の問題を取り上げたのは、自分自身が教育を受けている中で、教育の力は素晴らしいと感じたり、実は教育から全てが始まるのではないかと感じたからです。3年間海外に住んだ経験の中でも日本の教育との違いを感じ、「もし教育が受けられないとしたらどうなるのだろう」という素朴な疑問が湧いてきたことがベースになっています。今日は、大学生や留学生の新しい視点からの提案や、同世代の高校生からの提案、また審査員の方々の話を聞いて、大変勉強になりました。

受賞者が未来に向けた “新たな挑戦”をプレゼン



受賞者による論文発表に続き、審査委員長・NRI理事長の谷川史郎、特別審査委員の池上彰さんが、お祝いの言葉を述べるとともに、一つひとつの受賞論文を講評しました。

谷川審査委員長は、「今回は問題発見力を期待して、壮大なテーマを設定しました。その結果、幅広い問題を取り上げた力作がそろいました」と総評。池上彰さんは「甲乙つけがたい高レベルの作品ばかりで、難しい審査でした」、最相葉月さんは「現状を検証した上で独自のアイデアを打ち出していて、素晴らしかったです」と、受賞者をたたえました。

2016年12月22日に行われた表彰式において、表彰状授与のあと、受賞者による論文発表が行われました。

特別審査委員を務めた、ジャーナリストで名城大学教授、東京工業大学特命教授の池上彰さん、ノンフィクションライターの最相葉月さんをはじめ、NRI社内審査委員、NRI役員、学校関係者らを前に、各受賞者が論文の内容をプレゼンテーションしました。

受賞者は、それぞれが考える「世界を変える、新たな挑戦」を堂々と発表。その姿に、会場からは大きな拍手が送られました。



祝賀会

論文発表に続いて行われた祝賀会では、受賞者と池上さんや最相さん、NRIの審査委員や役員が、和やかな雰囲気の中で交流を深めました。

論文の感想や将来の夢について語り合ったり、記念撮影をする受賞者には、リラックスした表情が見られました。



コンテストへの応募動機

Share the Next Values! 「世界を変える、新たな挑戦」

応募総数3,103(大学生の部157、留学生の部31、高校生の部2,915)の中から、応募動機の一部をご紹介します。

応募動機

「『世界を変える、新たな挑戦』というテーマにひかれ、考えを深めて、表現したいと思った」

大学生

考えを発信したい

テーマに魅力を感じ、大学生になって、これからの日本をどう良くしたらよいかを考えたとき、何か形が残るものとしてアイデアを残したいと思った。

教師を目指す者として、日本が抱える教育の問題について自分なりの意見を持ち、それを世に発信したいと考えた。

自らの考えを論文という形で整理し、発信してみたいと考えた。自分が社会に出て活躍しているであろう世界を意識させる問題設定なので、普段から考えていることを形にしてみたいという思いがより強くなった。

学び・挑戦

自分が世界を変えるために何ができるかなど考えることがなかったので、大学で研究してきたことの集大成として応募しようと考えた。

官僚を志望しているため、政策に興味がある。応募を通して、ただ頭の中で構想を練るだけでなく、それらを多くの人々に伝えて共感してもらおう能力を伸ばしたいと思った。

論文作成を通して、問題意識の持ち方や社会問題に対するアプローチの仕方などを身につけたいと思った。

自分に向き合うため

自分の未来が明るくなるようなことを自らの力で生み出したいと思った。

大学3年生になって何かに打ち込みたいと考えていたときコンテストを知り、新しい自分と向き合えるチャンスかもしれないと思った。

関心があることを論文としてまとめることで、自分が社会に対してできることや将来の進路を明確にするため。

自分の論文が外部に評価される機会は貴重。論文の形にすることで、自身の学習を振り返り、新たな発見があるのではないかと考えた。

留学生

留学生としての視点を生かして

さまざまな人や文化を知れば知るほど、視野は広がっていくと思う。ヨーロッパに留学したことのある中国人として、自分の積み重ねた視点を生かせると思った。

外国籍の留学生として、多様な観点から世の中の問題にアプローチしている。研究内容を世界に論文という形で表現したいと思った。

高校生

テーマにひかれて

テーマに興味を持ち、将来起こりうる問題について考えてみたいと思った。

夏休みの選択課題の一つだった。テーマにひかれ、思い切って自分の考えを表現してみたいと思った。

学校の総合の授業で貧困についての研究をしており、テーマが自分の研究と合っていたから。

未来を考えたい

小さなことからでも今自分ができることは何かを考え、それが少しでも未来につながるものになってほしいと思ったから。

小論文を書くことを通して、日本の将来を新しい視点で考えてみたかったから。

2030年の未来について深く考えることで、進路や将来に改めて向き合うことができると思った。

自分はこれからどんな世界で生きていきたいのか考え、自分と向き合う良い機会になると思ったから。

高校生である私が研究し、考えたことがどのように評価されるかを知り、これからの未来をどう生きていくかを考えるきっかけにしたいと思った。

どうしたら日本の未来が明るく希望に満ちたものになるのかを考える良い機会だから。

解決困難である社会問題について主体的に考えるとともに、それを自分の言葉で表現し、論じる力を身に付けたいと思った。

総合学習で行った個人研究から論文を作成したので、自分が調べたことや学習を通して抱いた主張を知ってもらいたいと思った。

自分が疑問に思っていることを探求し、考えを伝える絶好の機会だと思った。

NRIグループ社員による審査の感想

Share the Next Values! 「世界を変える、新たな挑戦」

1次審査の社内審査委員として関わった、有志の社員の感想の一部をご紹介します。

「問題意識の高さと、解決への強い想いに刺激を受けた」

大学生

問題意識が高く、現実的

昨年に比べて、全体的に**顕著なレベルの向上**が見られた。

大学生の**問題意識の高さ**を実感した。日本の未来も期待できるという気持ちになった。

「世界を変える」というテーマは壮大だが、その**スケールに負けずに大作と言え**る論文を仕上げてきた皆さんの意欲に頭が下がる思いがした。

理系・技術系、バイオ系などのテーマの論文には、**技術により諸問題を解決しよう**という意気込みを感じ、面白かった。

自分の経験と問題をうまくリンクさせ、自分事として考えている論文が多く、**説得力があつて想いが伝わってきた**。

どの論文も世界で起きている**問題を的確に捉え、有効な解決策**を用意できていて感心した。ただ、実現可能な保守的な論文が多かった。

現実的な提案が多く、現代の大学生は真面目な思考であることを認識した。

文献を読んで**丁寧に文章化**している点に感心した。ただ、具体的な事例を紹介するに留まっている感があったので、もう少し意見や想いを記述すると良いと思う。

よりスケールの大きい提案を

実現可能性が高く、書き方としても完成度高くまとまったものが多いと感じる反面、粗いながらも**スケールが大きいものは少なかった**。

文章がしっかりしていて視点も良いが、テーマに対して**変える対象のほとんどが日本社会に限定**されていた。そのため問題設定の多くが身近なテーマで、世界を驚かせるほどのものが見受けられなかった。

将来を真面目に考えた結果だと思うが、大学生になると**型にはまった論理展開**になりがちだと感じた。もっと現場での体験や情熱を大事にしてほしい。

留学生

日本人にはない視点を期待

日本文化の特徴をよく捉えた上で、グローバル（世界）との対比で**課題を深掘り**している。

普段あまり考えたことのない、**はっとさせられる論文**が多かった。

全般的に問題解決策の具体性、客観性、現実性について**もう少し深められる**といいと思った。

高校生

斬新な視点やアイデア

思いもしないような視点からの問題提起や斬新な**アイデア**があり、高校生の知見の広さを感じた。

高校生が現在の日本・世界の問題点に目を向け、考えていることに感心した。**大きな問題を解決したいという想い**があり、励まされる内容だった。

起承転結の構成や、事実・引用に基づく分析がしっかりされており、**高校生が論じたものとは思えない文章**のものもあつて驚かされた。

新聞の社説、本、WEB等で語られている内容をそのまま鵜呑みにせず、**高校生の価値観**をもとに考えられているものが多かった。

例年以上にしっかりと記述されていて、大学生と勘違いするほどの文章力だった。今年はテーマも難しかったと思うが、**自身の経験に基づき議論**を展開しており、素晴らしいと思った。

論理的に展開された文章が多いと感じた。資料や文献を効果的に利用し、視覚的にも数値的にも理解しやすいものが多く、**高校生の考察力の高さ**に驚いた。

高校生ながら非常にまとまった論文が多く、驚いた。高校生がいろいろな文献を読んで、**一生懸命未来を考えている**ことを実感できた。

提案の斬新性、具体性、主張の論証はいま一つだが、**社会問題をしっかり考えようという姿勢**が伝わってくる論文が多く、好感を持った。

突き抜けた主張を

問題解決策を提示して「国などがこう取り組むべき」と主張しているものが多く、**自らが「こう行動していく」**と論じたものが少ないのが残念だった。

自身が主張したいことやアイデアなど、一番重要な部分あまり書けていないものが多かった印象。全体のレベルは高いが、**突き抜けたものがなかった**。

全体的に新規性のある論点が少なく、当たり前な内容が多かった。「世界を変える」という期待と比較して国内の問題を多く扱い、**こぞんまり**していた。

ニュース等で聞きすぎる課題に対して解決策を考えるものがほとんどで、**「新たな挑戦」というテーマにはいま一步届いていない**ように感じた。

調べ学習的な内容のものもあった。筆者なりの問題意識や、テーマを掘り下げて考える知的好奇心の強さの有無で差が出ていた。

審査の感想

全国の高校や大学に出向いて応募を呼びかけました

毎年、NRI学生小論文コンテストの告知活動の大きな柱を担っているのが、有志のNRIグループ社員による「社内応援団」です。今回もチラシ、ポスター、昨年の受賞論文記録集を持って母校や全国各地の学校へ直接出向き、先生や生徒・学生たちにコンテストへの応募を呼びかけました。

関西大学

イノベーションにつながる提案に期待

小林 翔 (通信システム一部)

母校の関西大学 総合情報学部 総合情報学科で約80名の学生に対して講演を行いました。「日本や世界の未来のためには、イノベーションが不可欠。自由で斬新な切り口からイノベーションにつながるアイデアを提案してほしい」と応募を呼びかけました。参加した学生からは、「現役のシステムエンジニアからの話は大変参考になった」「改めて大学生活を見直す機会となった」といった感想が寄せられました。



広島県立安古市高等学校

8回めの母校訪問、昨年に続いて今年も入賞者

小室 一彦 (証券ソリューション事業本部業務管理室)

社内応援団としての母校訪問は今回で8年めになります。今回、先生方から「社会の現状などを聞くことで生徒自身が未来を構想するきっかけしたい」と伺い、キャリア教育の授業の一環として2年生全員(316名)に、社会人としての生活やNRIの事業内容・書籍について講演しました。「論文作成を、未来を深く考えるきっかけにしてほしい」と本コンテストへの応募も呼びかけました。母校からは毎年応募があり、今回も昨年に続いて入賞者が出たことを大変嬉しく思っています。



横浜共立学園中学校高等学校

「卒業生に聞く会」で将来に向けたアドバイス

伊藤 亜理沙 (流通システム三部)

母校では社会で活躍中のOGから体験談などを聞く「卒業生に聞く会」を以前から開催しており、今回、高校1年生183名に向けて講師を務めました。自分も高校のときに聞いた先輩OGの話を今でも覚えているため、多感な時期にある在校生が進路を考える際の参考材料として何か伝えられればと思いました。現在担当している仕事、将来に向けたアドバイスなどを話し、本コンテストについても「ぜひ未来について考える機会にしてほしい」と紹介しました。

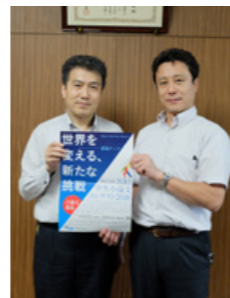


埼玉県立大宮高等学校

母校でNRIやコンテストについて紹介

高野 洋之 (保険基盤サービス部)

母校で先輩が教員をしている縁で今回の訪問が実現しました。当日は浅賀教頭先生にお会いし、NRIについて紹介したり、コンテストの意義をお伝えしました。本コンテストについては先生から学校内で生徒に紹介したり、個別に応募を勧めてもらえることになりました。



島根県立津和野高等学校 島根県立大学

高校併設の町営塾で小論文の特別講座を開催 大学では授業でコンテストを告知

下田 浩誉 (流通システム開発室)

津和野高等学校を訪問して宮本善行校長先生にコンテスト資料一式を手渡しし、応募をお願いしました。津和野高等学校には魅力化コーディネーターとして、本コンテスト受賞OBの松原真倫さん(2008年大学生の部の大賞受賞)が携わっています。宮本先生からは「学校全体にPRする。夏休みの課題として読書感想文の代わりにコンテストへの応募も認めるか検討したい」と、前向きなコメントをいただきました。



また、高校併設の津和野町営英語塾 HAN-KOHにて、「小論文作成スペシャル授業」を開講しました。HAN-KOHの運営は津和野町に雇用された専任スタッフと大学生・大学院生のインターンが支えており、事前にPRポスターを作って塾生を集めてくれました。小論文を書く際の構想作り、付箋紙を使ったアイデア出し、さまざまな角度からアイデアをグループ化する方法をワークショップ形式で学んでもらい、発想を転換するということを体感してもらいました。受賞者OBの松原さんからのコンテスト応募の呼びかけに、名乗りを挙げる生徒も見られました。

*

島根県立大学では、キャリアセンター長の久保田典男准教授の担当科目「ベンチャービジネス論」の冒頭で、学生約80名にコンテストを紹介する時間をいただくとともに、授業も見学し、学生によるビジネスプランの発表に対して講評を求められました。さらに、キャリアセンター副センター長 松尾哲也専任講師の総合政策学部1年生必修授業においても、学生約200名にNRIの紹介とコンテストの告知を行いました。

先生から見た「NRI学生小論文コンテスト」

創価高等学校

高校生の部
優秀賞受賞者の在籍校

大矢 英行 教諭

当校はスーパーグローバルハイスクールの指定を受けており、高校生の目線で地球規模課題に取り組む能力の育成プログラムを行っています。模擬国連を通じて国際関係について学んだり、人権、紛争、貧困といったテーマについて生徒が探求しています。

受賞した生徒は、平和の問題を考える国内外でのフィールドワークにも参加していて、これらの活動を通じて得た気づきをもとに個人で研究を続け、論文をまとめました。今回、他の受賞者の提案から受けた大きな刺激は、学校全体に還元したいと思えます。今後も生徒たちが培った力を発揮できる場を見つけ、生徒の挑戦を応援していくつもりです。



名古屋市立菊里高等学校

高校生の部
特別審査委員賞受賞者の在籍校

小林 真緒 教諭

担当する高校1年生のクラスで、国語の夏休みの課題として取り組みました。自分の志望する進路を考えて、図書館で興味や関心のある本を選ぶことから始め、その本を読んで各々が課題を設定しました。「世界を変える、新たな挑戦」というテーマは幅広い課題設定ができるので、生徒も取り組みやすかったようです。

小・中・高の国語では、読む力に比べて書く力と話す力の学習が足りないのが実状です。外部のコンテストへの応募は、生徒の「書く」モチベーションも高まります。生徒の独創的なアイデアを引き出す環境を整えるのは教員の役割なので、来年度以降もぜひ応募させたいと考えています。



おわりに

昨年、10回目を迎えた「NRI 学生小論文コンテスト」。

節目となる年を終えた、11回めのコンテストをどう盛り上げていくのか事務局で議論を重ねました。

2次審査委員からは「荒削りでも、斬新な切り口で問題提起している論文を評価したい」、「自ら動く、世界を変えていく、という意思を感じる論文を読みたい」との意見があり、今回の「世界を変える、新たな挑戦」というテーマが決まりました。また、審査基準もこれまでのものから「問題発見力」に重点を置いたものに変更しました。

過去最多となる3,103の論文には「世界をより良くするために自分自身がやりたいこと、やるべきこと」が書かれた熱い論文が多くありました。

白熱した審査の中で受賞が決まった論文を、皆さまと共有できればうれしく思います。

今回も多くの学校や先生方に告知のご協力をいただきました。

この場を借りて、心より御礼申し上げます。

このコンテストが生徒・学生の皆さんの「新たな挑戦」を始めるきっかけの一つになれば幸いです。

2017年3月

「NRI 学生小論文コンテスト2016」事務局

メディアでの掲載

「NRI 学生小論文コンテスト」は、毎回さまざまなメディアに取り上げられています。

その一部をご紹介します。



「岐阜新聞」2016年12月28日付



「上毛新聞」2016年12月26日付



「大分合同新聞」2017年1月12日付 朝刊



「高校生新聞」2017年3月1日発行 第244号



NRI 学生小論文コンテスト2016

Share the Next Values!
「世界を変える、新たな挑戦」

野村総合研究所 サステナビリティ推進室

発行：2017年3月

Copyright© 2017 Nomura Research Institute, Ltd. All Rights Reserved.



株式会社 野村総合研究所

〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-2

大手町フィナンシャルシティ グランキューブ

Tel.03-5533-2111

<http://www.nri.com/jp>